

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520676

研究課題名（和文）狩猟採集社会における定住・移動性と集団の空間的流動性に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）Historical and geographical study on the residential stability and fluid residential groupings among the hunter-gatherer societies

研究代表者

遠藤 匡俊（ENDO MASATOSHI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20183022

研究成果の概要（和文）：世界の狩猟採集社会のなかでは、定住性が高いアイヌ集落を対象として、定住性の程度、集落の血縁率、集団の空間的流動性の程度それぞれの関係を分析した。その結果、「集落の存続期間が長くなると集落の血縁率は低くなる」という傾向はなかった。また、集落の分裂・結合の程度と集落の血縁率の間にもとくに関係はなかった。集団の空間的流動性には血縁共住機能があり、集落の血縁率が維持されていると考えられる。移動性の程度に関わりなく、「血縁から地縁へ」という変化は生じない可能性がある。

研究成果の概要（英文）：Membership within a residential group is not stable in hunter-gatherer societies, such as those of the San, Mbuti Pygmy, Hadza, Inuit, Orochon, and Ainu. The study focuses on the Ainu as hunter-gatherers in the Mitsuishi district of Hokkaido, Japan, 1864-1869. The degree of settlement stability time had no correlation with the degree of blood ratio of settlement. There was no tendency that the settlement stability time became longer, the blood ratio of settlement became lower. The household stability time had no correlation with the average blood ratio of settlements that were inhabited by household members. There was no tendency that the household stability time became longer, the blood ratio of settlement became lower. It can be estimated that fluid residential groupings had close kins co-residing function in hunter-gatherer societies. It is recognized that fluid residential groupings had the function of ensuring sustainable blood kin relationships among settlement dwellers. And it can be postulated that sustainable blood kin relationships among settlement dwellers had been occurring with some functions through fluid residential groupings for a long time in the hunter-gatherer societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：歴史地理学，アイヌ，蝦夷地，狩猟採集民，集団の流動性

1. 研究開始当初の背景

現存の狩猟採集社会で主に現地調査によって確認されてきた集団の空間的流動性は、歴史的史料の分析によっても確認することができる現象である。様々な狩猟採集社会において共通してみられる現象であることに注目してきた。農耕民や牧畜民ではなく狩猟採集民でみられることから、地球上で農耕・牧畜が開始された1万年前よりも以前から、狩猟採集活動によって暮らしていた人々にも集団の空間的流動性が生じていた可能性があると考えられる。このような背景から集団の空間的流動性について様々な観点から分析し考察することが重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、狩猟採集社会の特徴の一つである集団の空間的流動性の程度を測定し、それが定住性あるいは移動性の程度、集落の血縁率とどのような関係にあるかを探ることである。

3. 研究の方法

アイヌについては、史料として「人別帳」を用い、集落の存続期間、集落ごとの居住者（家族単位）の変化、集団の流動性の程度、集落の血縁率の測定を行った。ブッシュマンについては、現地調査報告書を資料として、集落の存続期間、集落ごとの居住者の変化の分析を行った。オロチョンについては、現地調査報告書を資料として、集落の存続期間、移動距離、集落ごとの居住者の変化、集団の流動性の程度の分析を行った。

集団の流動性の程度を分析するうえで、分裂の流動性と結合の流動性に分けて、その程度を測定した。分裂の流動性は、ある年に1集落を構成した n 戸の家が次の年には p 個の集落にそれぞれ何戸ずつ分裂したかを考慮した数式を用いた。同様に、結合の流動性は、ある年に1集落を構成した m 戸の家が前の年には q 個の集落にそれぞれ何戸ずつ居住していたかを考慮した数式を用いた。

集落の血縁率は、集落内のほかの家と親子、兄弟姉妹関係で結びついている家数を求め、それが総戸数に占める割合で示した。

アイヌとオロチョンを対象として、集団の空間的流動性の程度を比較するうえでは、史料の記述内容が両者では異なっているために、アイヌの分析方法をそのまま適用することはできなかった。そこで、ある年に i 家と同じ集落に居住した家のなかで、一定期間後にもいずれかの集落に居住したことが確認される家数に着目して、そのなかで一定期間後にも i 家と同じ集落に居住した家数を求めることで集落共住率を家ごとに求めた。

4. 研究成果

(1) 世界の狩猟採集社会のなかでは、定住性が高い1864～1869年の東蝦夷地三石場所のアイヌ集落を対象として、定住性の程度、集落の血縁率、集団の空間的流動性の程度それぞれの関係を分析した。その結果、「集落の存続期間が長くなると集落の血縁率は低くなる」という傾向はとくに認められなかった。また「家の同一集落内滞在期間が長くなると血縁率は低くなる」という傾向もとくに認められなかった。集団の空間的流動性の程度と集落の血縁率の関係を分析した結果、集落の分裂・結合の流動性の程度と集落の血縁率の間にもとくに関係はなかった。これは集団の空間的流動性が、移動する家のみで形成されるのではなく、集落内に定住する家と移動する家の組み合わせで生じており、集団の空間的流動性には血縁共住機能があり集落の血縁率が維持されているためと考えられる。集落の血縁率の変動率（絶対値）は平均24.9%と大きく、その変動は主に集団の空間的流動性に起因していた。多くの場合に集落の血縁率は50%以上に保たれており、血縁率は平均73.6%である。この結果は、三石場所のアイヌ集落においては、移動性（あるいは定住性）の程度に関わりなく、集団の空間的流動性によって集落の血縁率は低下しない可能性、つまり国家という枠組みのなかに組み込まれながらも「血縁から地縁へ」という変化は生じない可能性があることを示唆する。

(2) 世界の狩猟採集社会の特徴の一つとして集団の空間的流動性があげられる。これまで複数の異なる民族を対象として流動性の程度を比較した研究例はほとんどみられなかった。三石場所と紋別場所のアイヌ、大興安嶺と小興安嶺のオロチョンを例に、集落共住率を算出した。その結果、同一集落内に定住する傾向が強く集落を構成する家があまり変化しなかった紋別場所のアイヌでは、集落共住率が0.9～1.0である家の総家数に占める割合は73%ほどであった。一方、多くの家が集落間で移動する傾向が強く集落構成が流動的に変化していた三石場所のアイヌでは、集落共住率が0.9～1.0である家の総家数に占める割合は43%ほどであった。三石場所のアイヌと同様に、集落構成が流動的に変化していたオロチョンでは、集落共住率が0.9～1.0である家の総家数に占める割合は25%とさらに低く、0.1～0.2の家は33.3%、0.3～0.4の家は25%であった。13年間におけ

る集落共住率の経年変化をみると、オロチョンの値は常に0.11~0.33であり、三石場所のアイヌよりも下回っていた。アイヌの事例を1戸ずつ検討しても、集落共住率の値が常に0.4未満であるような事例は1例もなかった。アイヌ社会のなかでも三石場所のアイヌ集落においては集団の空間的流動性が大きかったが、オロチョンの一家の場合にはさらに流動性が高かった可能性がある。

(3) 現存の狩猟採集社会においては、集団の構成員が頻繁に入れ替わる集団の空間的流動性が生じていたことが知られている。従来の狩猟採集民研究においては、集団の空間的流動性の程度が必ずしも明確ではなく、空間的流動性と空間占拠の平等性の関係については明らかにされていない。1856~1869年の東蝦夷地三石場所のアイヌ集落を対象として、分裂の流動性の程度と定住性の程度を測定し、空間占拠の平等性について考察した。

集落が分裂しなかった場合には、すべての家が他の土地へ移動してもそのまま定住しても、その集落に居住した家間でみた空間占拠の平等性は高いと考えられる。集落が分裂した場合であっても、複数の土地へ別々にすべての家が移動すれば居住者間の空間占拠の平等性は高いと考えられる。しかし、集落が分裂した場合に、一部の家のみが他の土地へ移動し、残りの家がそのまま定住したときには、両者間における空間占拠の平等性は低いと考えられる。

55集落を対象とすると、54.5% (30/55) の集落において空間占拠の部王道性は高かった。このうち分裂した21集落を対象とすると、存続期間が1年と短い集落では空間占拠の平等性は高く、存続期間が1年を超える集落では空間占拠の平等性は低い傾向があった。集落の分裂の有無に関わらず55集落すべてを対象としても、集落の存続期間が1年を超えると空間占拠の平等性は低くなる傾向がみられた。

集落が結合しなかった場合には、すべての家が他の土地から移動してきても、そのまま定住しても、その集落に居住した家間でみた空間占拠の平等性は高いと考えられる。集落が結合した場合であっても、複数の土地から別々にすべての家が移動してくれば空間占拠の平等性は高いと考えられる。しかし、集落が結合した場合に、一部の家のみがそのまま定住し続け、残りの家が他の土地から移動してきたときには、両者間における空間占拠の平等性は低いと考えられる。51集落を対象とすると、全体的には58.8% (30/

51) の集落において空間占拠の平等性は高かった。このうち結合した23集落を対象とすると、集落の存続期間に関わらず空間占拠の平等性は低い傾向があった。全体的には空間占拠の平等性が高い集落の数がわずかに多い傾向がみられた。しかし集団の空間的流動性が生じて、集落が分裂・結合した場合には、空間占拠の平等性は低い傾向があった。

(4) 1822年の有珠山噴火の火砕流・火砕サージにより南麓のアブタ集落が被災したが、死亡者数は明確ではなかった。本研究ではアイヌの死亡者数を確定し、アブタ集落のアイヌの居住者数と災害時の滞在者数を復元した。滞在者数に対する死亡率は非常に高く、火砕流・火砕サージに遭遇した際には生存の可能性が低いことを示した。一方、居住者数に対する死亡率は低く、これは多くのアイヌの人々は自らの食糧となるサケ(鮭)を漁獲するためにシリベツ川上流域へ季節的移動をしておらず不在であったことが一因と考えられる。当時のアブタ集落は和人の社会経済的活動に深く組み込まれた強制部落(強制コタン)として知られてきた。しかし、10月から翌年3月ころにかけて行われていた季節的移動は主体的・自律的な行動であった可能性が高く、このような生活様式が災害軽減に寄与していたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

(1) 遠藤匡俊, 1799~1801年のエトロフ島におけるアイヌの和名化と風俗改変の空間的・社会的拡散過程, 地理学評論, 査読有, Vol. 85(3), 2012, pp. 236-258.

(2) 遠藤匡俊・張 政, 狩猟採集社会における集団の空間的流動性の測定に関する一試論, 季刊地理学, 査読有, Vol. 63(1), 2011, pp. 17-27.

(3) 遠藤匡俊, 19世紀中期の東蝦夷地三石場所におけるアイヌ集落の存続期間と血縁親族関係, 季刊地理学, 査読有, Vol. 63(2), 2011, pp. 85-106.

(4) 遠藤匡俊, アイヌの定住期間からみた集団の空間的流動性—1856~1869年の東蝦夷地三石場所を例に一, 季刊地理学, 査読有, Vol. 61(1), 2009, pp. 19-37.

[学会発表] (計6件)

(1) 遠藤匡俊, アイヌの和名化と風俗改変および幕府の同化政策—寛政10~享和元(1798~1801)年のエトロフ島を例に一, 第

5 6 回歴史地理学会大会，砺波市文化会館（富山県），2013. 5. 19.

（2）遠藤匡俊，1800年代初期のアイヌ集落にみられる戸数と人口の特徴，2011年度日本地理学会春季学術大会，首都大学東京（東京），2012. 3. 28～29.

（3）遠藤匡俊・土井宣夫，文政5（1822）年の有珠山噴火によるアイヌの死亡者数と火砕流の到達範囲，2011年度東北地理学会秋季学術大会，仙台市戦災復興記念館（宮城県），2011. 10. 8.

（4）遠藤匡俊，アイヌ集落の空間的流動性と空間占拠の平等性—東蝦夷地三石場所を例に—，2010年度東北地理学会秋季学術大会，北海学園大学（北海道），2010. 9. 18.

（5）Masatoshi ENDO，Sustainable blood kin relationships among settlement dwellers through fluid residential groupings of the Ainu as hunter-gatherers in the Mitsuishi district of Hokkaido, Japan, 1856 – 1869. 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University(Kyoto), Japan, 2009.8.24.

（6）遠藤匡俊，アイヌ集落の分裂時における空間占拠の平等性，第52回歴史地理学会大会，神戸大学（兵庫県），2009. 5. 23.

〔図書〕（計2件）

（1）Masatoshi ENDO，Sustainable blood kin relationships among settlement dwellers through fluid residential groupings of the Ainu as hunter-gatherers in the Mitsuishi district of Hokkaido, Japan, 1856–1869.

KINDA, A. et al. eds. Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University Press, 2010, 60–61.

6. 研究組織

（1）研究代表者

遠藤 匡俊（ENDO MASATOSHI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20183022